

第3章 「観光・地域振興に活用されている馬」

観光・地域振興

伝統的馬文化を観光資源化する

沖縄こどもの国

琉球競馬「ンマハラシー」

地域にあった古来の琉球競馬を70年ぶりに再現



事業の概要

甦った琉球競馬「ンマハラシー」

70年ぶりに開催された沖縄伝統の競馬大会である。古くは王朝時代に士族の楽しみとして始まり、沖縄各地で300年間開催されていた伝統的な行事であった。さらに、明治時代には農民の娯楽として全島の広まり、深く生活や仕事を通じて家族のように溶け込んでいた多くの愛馬が出演してお祭りの色彩も加え、盛んに大会が繰り広げられたようである。しかし、太平洋戦争の悪化により昭和18年の開催以来中断されており、地域としては重要な文化資源でもある伝統行事再開の機会を模索し続けた。そうした中で、沖縄の伝統文化の継承と観光資源化をめざし、沖縄市と「沖縄こどもの国」が協力して平成25年3月に第1回大会の開催を実現させた。実に70年ぶりに復活した注目の取り組みである。

1) 事業の特色

「ンマハラシー」は、伝統的に存在した沖縄固有の馬文化を復興させ、地域の遺伝子ともいえる文化を新たに研究調査し、極力忠実に「再現」することによって地域の観光振興と活性化に結びつけるという画期的な取り組みである(事業名: 沖縄市伝統文化観光推進事業)。

2) 他に類をみない「琉球競馬」の競技法

トーナメント方式で「美しさ」を競うレースは2頭ずつが約50mのコースを往復して対戦、馬の

足並みの美しさや姿勢、乗り手とのリズムの合い具合などをみて、審判(ンマスーブカシラ)が勝敗を判定する。歩法は、全力の駈歩(かけあし)は禁止で、比較的ゆっくりの「側対歩と呼ばれる速歩が基本」である。琉球地方では軍馬としての需要がなかったため、このような優美さを競う競馬が行われており、この方式は世界的にも珍しいユニークなもので、沖縄古来の独特さが魅力のひとつである。



「ンマハラシー」の広報ポスター

3) 伝統衣装・馬装

乗手手の装束や馬のいでたちも伝統的な美しさを競うため、衣装で着飾っている。それらは沖縄の高い織の技術と鮮やかな模様の「知花花織（ちばなはなおり）」をはじめ各地域の織物で作られている。また、乗馬袴姿で2尺5寸の鞭を手にする所作、紺の羽織をはじめ、衣装や馬鞍の当時の復元に力を注いでいる。



乗手も馬も琉球伝統の装束と馬装で臨む

4) 「ンマスーブカシラ」(審判)の工夫

2名の審判は70年振りがゆえにご高齢である。また基準が速さなどではないためわかりづらい。そこで、審判を3名に増やし、かつ解説を加えるなどを行い判定の明確さを加えている。伝統を守るという使命や事態に対応しながらも、継承すべき文化資産も時代とともに多少の合理的進化が伴うもの。現在では90歳を数える2名の審判による判定が、次代へ引き継ぐべきモノサシになっていることも見るべきポイントになっている。



大会関係者（うるま市照屋氏と那覇市宮里氏、沖縄県馬術連盟会長花城氏）

「ンマハラシー」の開催実績

平成 27 年度開催実績		
開催回	開催日	入場者数
第 1 回	5 月 31 日	2,048 人
第 2 回	10 月 25 日	2,260 人
第 3 回	1 月 31 日	2,963 人

運営体制等

事業主体は公益財団法人沖縄こどもの国である。事業費は沖縄市が補助している。「沖縄こどもの国」は沖縄市にあり、動物園を中心とした3つの大型施設を保有する県内でも有数のテーマパークである。遊園地の閉館や動物園改装工事のため一時閉館などがあったが、平成 16 年 4 月 15 日に財団法人 沖縄こども未来ゾーン運営財団が母体となってリニューアルオープンしている。沖縄県が本土復帰の記念事業の一環として建設・設置したものである。こどもの未来ために謳った施設であり、動物園・こども博物館ワンダーミュージアム・交流施設チルドレンセンターが柱になっている。

馬という動物を通じて郷土の歴史、地域の文化資源に触れ、学び、担い手育成につながる「ンマハラシー」への取り組みは、設立・設置目的と合致していると捉え、沖縄市が積極的に補助を行っている（所管：沖縄市役所観光振興課）。

第3章 「観光・地域振興に活用されている馬」

背景(地域連携、展望等)

沖縄地域には、馬具、馬装、馬への呼びかけ(扶助)方などに、他地域にはみられない固有のものがある。そうした伝統を継承する文化の一つが琉球競馬である。沖縄県は人口が140万人を超え、人口密度が比較的高いが、沖縄こどもの国は広大な面積を有すパークとなっており、与那国馬をはじめ様々な動物種に触れることができ、癒しの空間を提供している。



<与那国馬の特徴>

体高:110~120cm、毛色:鹿毛と栗毛が多い。与那国島の北牧場と東牧場で集団で保存されている。与那国町の天然記念物指定。その数は全国で現在112頭ほどである。

在来馬の辿った道

日本在来馬8品種のうち、沖縄県には2種(与那国馬、宮古馬)が分布している。また、トカラ馬はかつては鹿児島県喜界島を中心に多く分布していた。このような在来馬は、島嶼の環境に適

応した馬の一部が今に生き残っているものである。「ンマハラシー」で走っている代表格が「与那国馬」である。与那国馬の体格は小型で島内の農作業や交通の役割を担っていた。現在は島内の数か所の牧場や農家で飼われている。

在来馬は古墳時代から明治維新までの1500年間活躍した。しかし、軍馬や農耕馬の体格向上のため明治政府によって欧米から大型馬を輸入し、在来馬と交配させた。昭和14年制定された馬種統制法では雌は西洋馬との交配を義務としたため雄は種馬として使えなくなり、在来馬は以来激減の一途を辿ることになる。在来馬は古くは50種類を数えていた。



現存する在来馬(8品種)

事業の継続を可能にするための取り組み

1) 馬の生産と調教: 与那国馬など日本在来馬の多くは「ンマハラシー」にみられるように一定レベルの運動能力を有している。そのため、日本在来馬は伝統競馬や流鏝馬などに用いる上で都合が良く、そのような目的のための馬の生産と調教も必要である。

2) 北海道との連携

日本在来馬の一つである「どさんこ」(北海道和種馬)の保存・普及啓発を目的として、北海道

和種馬保存協会は「シマハラシー」を参考に平成26年度より「じみちコンテスト」を実施している（北海道では昔から側対歩は“じみち”と呼んでいる）。日本の南端と北端が共通した取り組みを行っており、人的交流をはじめ、将来は交流開催もと意気込みを見せている。トレーナーとして北太平洋シーサイドライン乗馬クラブ安藤泰幸氏、阿部栄子氏が貢献している。



普段は札幌競馬場で体験乗馬として活躍している北海道和種馬の「マカロン」

3) 丁寧な調査研究活動

競技に必要な側対歩、審判方法をはじめ伝統文化としての再現に向け、文献やヒヤリングによる調査や民具の調査を継続的に行う必要がある。「知花花織(ちばなはなおり)」による衣装、和鞍、和鎧の復元を実施してきたが、さらに、馬上盃(騎乗者が水を入れた盃を溢れさせずに走った、という史実あり)の再現を関係者の協力によって復元の要素に新たに加えており、調査研究の成果が今後とも期待される。

4) 「こどもの国 シマスクール」の展開

馬とふれあい、馬と人が一緒に働き、そして一緒に暮らしてきた歴史を体験することで地域の文化を学ぶことを目的に開催している。こどもたちの自主的な姿勢、挑戦心を育成支援するための連続プログラムである。ここで育ったこども達が今大会をはじめ「おきなわ芸能フェスティバル」「沖縄国際カーニバル」などのイベントに参加し

ている。次世代への継承、次代を担う人材育成のために不可欠な底辺の拡大への大切なアプローチである。



馬には多くの人を引き付ける魅力がある。市民とのふれあいは重要な取り組み

5) シマハラシーカタイビ(ワンポイントガイド)

沖縄こどもの国で行われている乗馬体験にあわせて開催している。歴史的背景や地域が育んできた馬文化への理解を深めながら、ファンづくりを進めている。

6) 広域化

複数地での開催や、本島以外の島からの参加促進で、全県化を図る取り組みが今後の課題である。島馬(シマンマ)の復活を目指し、現在20~30頭の出場頭数であるが、その拡大や沖縄県各地での開催に向けて関係団体や地域で地道に取り組まれている。今後は、さらに集客工夫や演出企画を検討し、魅力アップを図ることで多くの方に楽しんでいただけるよう取り組むことと、それを商品化して情報発信し、観光事業者などとの連携による集客活動と観光収入の向上が期待される。

.....

沖縄こどもの国(未来課)
〒904-0021 沖縄県沖縄市胡屋5-7-1
(URL) <http://www.kodomo.city.okinawa.okinawa.jp/index.shtml>
(TEL) 098-933-4190